

〈海外留学体験記〉

英国 Lancaster 大学 (2010年7月～2012年6月)

京都府立医科大学大学院医学研究科神経内科学 笠井高士 (平成10年卒)

私は2010年7月から2012年6月まで英国 Lancaster 大学の David Allsop 教授のもとで研究をしてまいりました。同地での経験を簡単に紹介したいと思います。

留学のきっかけは偶然が重なったものでした。大学院で研究が上手くいかず悩んでいましたところ、私の指導をして頂いていた徳田講師（現准教授）と以前から親交のあった Allsop 教授の研究室から先行論文が発表されたことがきっかけです。彼らの手法を応用することで一気に研究が進みましたので、論文を共同で報告し、論文のお祝いと今後の共同研究の打ち合わせのために2009年10月にランカスターを訪ねた際に留学を打診したところ快諾して頂きました。ただし『給料を支払うことはできないが、助成金があるならば来ても構わない』というものでしたので、留学準備はまず研究助成金を申請することから始めました。いくつか助成金申請をしたところ、幸いそのうち1つが翌年の2月に採択され、そのとき初めて留学が現実的なものとして感じられるようになりました。ビザの申請や引越準備を慌しく済ませ、なんとか同年の7月に渡英に漕ぎ着けました。

ランカスター市はイングランドの北西部に位置する人口4万人程度の比較的小さな街です。非常に歴史の古い街であり、文献によると西暦70年頃にはイングランドを属州化したローマ人によって街の形態が整えられていたとありますので、英国の中でも最も初期に建設された街の一つであり、京都よりも相当に古いこととなります。古くから英国王室の重要な領土であったランカシャー地方の中心都市として栄え、常に国王もしくは重要な親族（ランカスター公爵）に支配されてきたことはこの街の人たちの誇り

とするところであるようです。街並みも古めかしく中心街にはランカスター城を始めとする中世以来の建築物を見ることができます。夏は涼しく、冬でも暖かなアイルランド海に面していることから英国の中では比較的、気候の穏やかな地域とされており、豊かな牧草地に恵まれた自然環境に優れた地域でもあります。

ランカスター大学自体は1964年に創設された比較的新しい大学です。我々の研究室は大学のほぼ中ほどにあり、教授1名、スタッフ教員1名、ポスドク1名、私、大学院生4名のメンバーで神経変性疾患の早期診断に繋がるバイオマーカー解析および治療薬の開発を中心テーマとして取り組んでいました（写真1, 2）。外国からの留学生は私と大学院1年目のイラン人女性の二人で、この二人が教室内の小グループとして本学神経内科と Allsop 教授との共同研究プランを実際に遂行してきました。ちなみに Allsop 教授は1990年台に2年間、東京の精神医学総合研究所に留学しておられた親日家でもあり、私たち夫婦を非常に暖かく迎えていただけたことは非常に幸運でした。後になって知ったことですが、異文化の中で暮らすことは保守的な英国人の中では比較的めずらしいことで、こうした経験が Allsop 教授の指導方針の1つである“Multiculturalism”に深く関係していたようです。実際、これまでも非ヨーロッパ人種の留学に寛大でリビア人やイラン人のような、英国社会ではあまり歓迎されているとはいえない人たちも能力があれば受け入れる方針を徹底しておられ、彼らの仕事が重要な業績になっていることがこの教室の特徴でした。

私のこの研究室で Alzheimer 病の体液診断バイオマーカー技術の改良と Parkinson 病の病原



写真1



写真2

蛋白質の体液動態について取り組んできました。前者は以前から本学とランカスターとの間で共同研究してきたテーマであり、この研究を行うことは私にとって最優先の課題でした。Alzheimer 関連の蛋白を相手にするのは初めてでしたが、幸いランカスター大学にはこの領域に経験豊富なスタッフがいましたので彼に指導してもらうことで当初の目的を果たして帰国することができました。後者のテーマは私が渡英してから提案したものです。当初は全く相手にされないのではと不安でしたが、つたない英語

で書いた research plan であるにも関わらず、あっさりと研究を許可して頂いた上、上述のイラン人大学院生に技術指導して研究をするように言われたことは望外の喜びでした。実験は主に彼女が行い、問題点を議論しながら研究を進めてきたのは良い思い出です。研究内容は私の帰国後、彼女の学位論文の一部として活用され、このテーマについては我々の教室とランカスター大学の共同研究として現在も引き継がれていることに満足しております。

この留学を通して私が経験したことは、研究資金の確保が最も重要であるということにつきます。英国は特にそうでしたが、昨今は世界的な不景気であり、資金が潤沢な研究室というものは殆どありません。PIといわれる人たちはすべからず、できるだけお金を使わずに即戦力を雇って、論文という結果を出したいと考えています。全く資金を用意せずに、実験手法は行ってから先輩に教えて貰うつもりで研究室の門を叩くのは極めて難しくなっており、最低でもどちらかは持っていないと相手にされない可能性が高くなっているように感じました。私自身も自分の生活に関する留学助成金の他に渡英直前に獲得した研究資金と渡英後に獲得したグラン

トにかなり助けられました。特に渡英後に初めてグラントが取れたときにはラボの友人全員からやっと一人前になれたという感じで祝福してもらえたことを良く覚えています。グラントを取るということがいかに重要視されているかを実感しました。自分自身のスキルが留学先の求めているものと一致しておりかつ、一定の水準に達しているのかも重要なポイントで英語力よりもむしろ重視されているように感じました。自分自身は臨床家として過ごした期間も長く、実験が得意という訳ではありませんでしたが、大学院時代に良い指導をして頂いていたこと、留学先と同じテーマを研究していたおかげで実務的なことで戸惑うことが少なかったことには非常に感謝しております。

留学中の一番の思い出は2011年10月にAllsop教授と共に一時帰国して、大学で研究打ち合わせが出来たことです(写真3)。訪日の際には中川神経内科教授(現北部医療センター長)を始め、大学の皆様に大変お世話になったことをこの場を借りて感謝いたします。Allsop教授も久

しぶりの日本行きをととても喜んでおられ、観光や日本食も満喫されていました。よほど楽しかったらしく、ランカスターに帰国後も中川教授・吉川学長と並んで記念撮影した写真を、いつも教授室に飾って、来客のあるたびに見せておられました。私にとっても久しぶりに日本の家族に会うことができ、よい休暇となりました。こうしたよい交流関係が帰国後も継続していることは留学をした者としてはとても嬉しいことで、2013年の4月にも再びAllsop教授と一緒に仕事をしていたイラン人大学院生のFatema Noriさんに来日してもらうことができました。このときは私と妻とで出来る限りの歓迎をして二度目の京都をエンジョイしていただくことができました(写真4)。来年度は私たちが渡英して出来るだけこうした良い関係を継続したいと考えております。

最後になりましたが、今回の留学に際してご助力を頂きました、神経内科医局諸先生方と種々のサポートをしてくれた両親、異国の地での生活を支えてくれた妻に感謝いたします。



写真3



写真4